



主張

新たな時代への取組を考える

～新春座談会に参加して～

牛田 宏昭

明けましておめでとうございます。昨年の五月に始まった令和元年も明け、新たな時代が本格的にスタートする、そんな年明けです。昨年も多く自然災害が起こった年でした。八月の九州北部豪雨、九月の台風一五号、十月の台風一九号と立て続けの災害に見舞われ、多くの被害が発生しました。被災された皆様には、衷心よりお見舞い申し上げます。また、被災された学校や校長会が災害時の対応やその後の復旧に全力で取り組まれたことと拝察し、その取組に敬服するところです。学校における防災教育の充実や防災体制の構築の重要性は言うまでもないことですが、五〇年、一〇〇年に一度という災害が、毎年のように発生する中、これまでの各学校・地区の取組から学ばせていただくことが本場に多いと感じています。

さて、今回、全日中の新春座談会に参加させていただく機会を得ました。内容については本誌の中で詳述されているところですが、座談会のテーマの一つが文部科学省より中央教育審議会に諮問された「新しい時代の初等中等教育の在り方について」でした。その中で、諮問の前文に、新しい時代を担う子供たちのために学校教育も変わっていかなくてはいけないということと、これまでの日本型学校教育は、全体としては着実に成果をあげて



いるという二つのことが語られているという御指摘がありました。また、座談会前には、働き方改革について各地区が御苦労されている様子や新たな取組等の情報交換もさせていただきました。

新学習指導要領の全面实施に向けての取組が加速している中、急激な社会の変化を見据えた改革の必要性は待ったなしの状況です。加えて、働き方改革を進めることも待ったなしの状況になっています。教育改革を語るるとき、不易流行という言葉も合わせて使われまます。現状では、これまで不易とされてきたことにも踏み込んで考えることも必要なのではないと感じます。しかし、校長が新しい時代への対応や働き方改革の旗印のみにとらわれては、生徒たちが本当に必要としていることとの乖離が生じてしまいかねません。また、それに取り組む教員の混乱も心配されるところです。これまで不易としてきたことの本質を考える一方で、取り組む改革の本質も吟味し、校長として改革を進めていく、そんな力が試されていると実感しています。

昨年、自分が所属する名古屋市長長会では、東陸中愛知大会と大都市名古屋大会の二つの大きな大会を運営する機会に恵まれました。会の中で、全日中から、課題解決には、学校における創意工夫、意識改革という内部努力をした上で、(定数改善をはじめとした)教育諸条件の整備・充実が図られるよう、学校現場の現状をエビデンスベースで発信していくことが必要という言葉をいただきました。全日中の方針を踏まえ、各都道府県校長会だけでなく大都市校長会の一員としても、権限委譲に関わる課題が収束しつつある中、ことの本質を見極め、新たな時代に必要な改革に取り組んでいきたいと考えています。

(全日中副会長・名古屋市長長会副会長)